九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

九州大学新聞

https://hdl.handle.net/2324/1520703

出版情報：九州大学新聞. 520, 1965-01-25. 九州大学新聞部
バージョン：
権利関係：

九州大學新聞
発行所 福岡市箱崎町 九州大学新聞部
電話(65)0431
振替福岡13103
4頁15円・2頁10円
年400円・半年200円
発行人 平川亮一

広告のため非表示

連載（1）

いっぱん学生

現代の学生群像

過日、ある大学の学生部長が、現代の学生なんてちっとも昔と変わっていないではないか、と大だんびらを切っている記事を見て、その器量に感心した覚えがある。そんな風にナメられた「団交」をやった学生の方がつまらないのだが、果して、件の先生のいうように、学生たちが一世代前とちっとも変わっていないかどうかは議論の余地がある。議論する前に、学生の存在そのものを凝視すればわかることだが、そういう作業をしないところに学生部長などの特長があり、器量もある。私達はこれから数回にわたって現代の学生群像をさぐってみる。果してどんな「学生」がとり出されるかたのしみにしていただきたい。（編集部）

茫洋とした「社会」への恐怖心

対象はすべて現実的事がら

いっぱん学生――一般学生って一体なんだね。ちょっと定義づけてくれないか。こう誰でもつかまえて問うてみると大抵返答に窮する。人間とはなにか、こういった宇宙的空間を持った問いに等しいからであろう。強いて定義づけようとすれば、それぞれの立場からしか語ることはできない。たとえば、学生運動家に聞けば、自分以外の、なにか哲学的体系をぶち込んでやらねばならないデクノボウみたいな人間の層と考えるし、一般学生とおぼしき人に聞くと、学生運動やサークル活動を余りやってない平凡な学生でしょうと、学生運動家の裏側を語るだけであまりよい解答にはならない。

ここでは、なにもそれを定義づけるのが目的ではないが、一応このように筆者は考えている。それはそれを認識したり、書いたりしたい場合、それからはみ出る部分として存在している学生たち。従って、あきらかにこれから書いていく一般学生の姿は、生のままのそれではない、という原罪みたいなものを背負っているわけで、それは覚悟して、なおかつそれについて書くという積極的理由が現在あるとすれば、大衆と言おうが、一般学生と言おうが、それに接近することなしには何事も為しえないと信じているからである。それにしては、いまお前のやろうとしていることはプラグマチックではないか、つまらん、と罵倒するとすれば、いや、小海老で鯛を釣ろうなんていう大それた意図はない、と平にあやまるより他ない。

経済学部三年のT君は山口県の高校を卒業して、三十七年に現役で九大に入学した。入学当初、無味乾燥な受験勉強から解放された喜びで、自分なりの大学生活のプランをたてた。大学というところは「勉強」ばかりするところではないと先輩から話しを聞いて、ESSや音楽会などの文化的、実利的体験もそのプランの中には含まれていた。その当時の唯一の悩みといえばガール・フレンドの居なかったことだったので、彼は九大のバッチをつけて（バッチがないことには彼はどこにいても居心地の悪さを感じた）、街や公園に出かけて、それとおぼしき人に近づいたりしたがガール・ハントなどという勇気もなかったので、ただ少女たちが好ましい目つきで自分を見るのに満足せねばならなかった。そういうわけで彼の悩みは完全に解消されたわけではなかったが、ガール・フレンドをさがしに行くというその行為だけでも、今までの生活では夢想はしても、実行など及びもつかなかったものだけに、なんとなく満たされた気もしていた。

それから学生運動に接したわけだが、今まで政治のことなど考えたこともなかったし、それほど興味もなかったが、デモには虚栄心と社会にたいするなにかモヤモヤしたもので参加した。けれど、ただ自分が利用されているにすぎないしモヤモヤもどうにもならないのでだんだん遠ざかって行った。

そういったわけで「学生運動」が彼に及ぼした影響、良いにしろ悪いにしろ、それが自分の生活に対する態度決定を迫ったことはなかったと述べている。いままで家庭というものの中に居た彼には下宿生活は一つのショックであった。下宿生活をはじめた当初はその自由さを満喫していたが、学校から帰って、食事や風呂を済まして、外がうす暗くなるにつれて、自分が一人であるということがいや応なく知らされるのがつらかった。けれどこれも慣れや友人ということで解消されたが、自分が一人であることは三年の終りを迎えた現在別の意味で切実に感じられるようになっている。その一つは就職ということであり、他は望遠鏡から覗いたとき（彼の使った比喩）茫洋とした大きさ、あるいは重さとぼんやりと、それでいて、その茫洋として感じられる風景のように、自分がこれから入って行こうとする「社会」への恐怖心といったものである。

ここで私は敢えてT君に一つの質問をしてみた。「君は原子力潜水艦や憲法改悪についてどう思いますか」

それについて、彼は「反対だとか賛成だとか口で言うのはたやすいですね。だからそういう質問は無意味じゃないですか。反対の人はその運動をうまくやればいいし、私は私で私自身の〝原子力潜水艦〟や〝憲法改悪〟をかかえ込んでいます。それが何かと問われても困りますが、あるいは恋愛、あるいは生きること、およそこれらは普遍化できませんけれど、私にとっては原子力や憲法以上に重大なんです。無関心は賛成だなんて言いますが、それは要するに、逆運動なんかする人たちのヒガミじゃないですか。無関心を関心に持って行くなんて、客観的に言えば質がちがう問題のような気がします。」と答えてくれた。

彼の意識の中にはヘンリー・ミラーの「街のまんなかで行なわれないことはすべて贋ものである、要するに、文学にすぎない」という言葉が生きているのかもしれない。

彼の学問的興味、つまり経済学に対する興味は、はっきり言って大してない。何故なら、経済学を追求するだけの書斎的静けさの欠如と、何にもまして、それは「街のまんなかで行なわれないこと」であるからだ。彼は自負こそしないが「生活人」という意味においてはあらゆる経済学の頂点を抜きんでているし、「生活人」（正確には半「生活人」）であるが故の視野の狭さも見事にある、そうして何事にもまして彼の情熱の対象となるのは全て現実的なことがらであり、それ以外は「すべて贋もの」に見えるのかもしれない。

この「一般学生」の生活体験は「学生運動家」にしろ「特殊」学生にしろ、共通したものであるかもしれない。ただ彼等には理念の世界に上昇するには余りに生活の風が吹きすぎるし、その意味で「先鋭的」と称する学生運動家たちより以上に、現実的に先鋭的である。意識の世界に於いてはいまだ見るべきものはないにしろ、この現存在をすくい上げ、包摂する「総括」意識のない思想にしろ、すべて、彼等にとっては「政治」であり「文学」であることを止めないことは自明の理である。（あ）

（つづく）

九大人事

【採用】▼西山富夫、法学部講師に▼石進、教養部教授に▼佐藤雄二、工学部教授に▼都留大治郎、経済学部教授に▼種子田完俊、神戸商船大助教授より応用力学研究所助教授に【復職】▼綾部恒雄、教育学部講師【休職】▼大石行理工学部教授【外国出張】▼柴垣和三雄（理学部教授）香港大学の訪問教授として香港へ▼鳥山隆三（理学部教授）東南アジア古生物研究のためタイ国へ▼勘米良亀齢（理学部助教授）同▼古賀康八郎（医学部教授）第三回アジア産婦人科学会出席のためフィリピン、香港、中華民国へ▼真鍋大覚（工学部助教授）台風観測資料調査のため沖縄へ。

私の文学遍歴（7）

＜中村健次の手紙＞

島尾敏雄

この手記を書きつぎながら昔の仲間がなつかしく、今青森県の山中の或る鉱業所にいる中村健次に、彼をひきあいに出して回想した部分の切り抜きを私は送った。すると長い返事が来て、それを読んだ私は、彼と共に二十七、八年ほどの失なった日々に対する愛惜と寂寥をわかち合った思いがあった。しかし久しく会わない彼と今もし会うとしても、ふたりのあいだには隔てられた歳月の重さは消えうせて、かつての過渡の試みの中でぶつけ合っていたお互いの未成年がなお生きている状態を確かめあうことになりそうだ。

さてその手紙の中に、私たちが「十四世紀」の結成から「こをろ」に移り加わって行ったあとさきの事情について、彼の記憶による回想が書かれているので、それを私のふたしかな記録に重ねて、補ないをつけたいと思う。

まず彼の手紙は私に「第二次峠」のことを思い出させてくれた。それは「十四世紀」のまえに計画されただけでなく、あとで「十四世紀」事件でお互いがかかわり合うことになった中村健次も川上一雄も土師二三生もすでにいっしょに加わっていたというのだ。だから私たちはいきなり「十四世紀」の結成にとりかかったのではなく、そのまえにひとつの準備の段階があったことになる。それを指摘されて思いだしたが、そのとき私は、長崎高商にはいるまえに神戸で加わっていた「峠」という文学同人雑誌の再出発問題に襲われていた。それを自分だけのことにしないで、彼らまでさそいこんだのだったろう。「峠」はもともと神戸一中を卒業したばかりの金森正典がガリ版を自分できってはじめたのだが、彼の弟と神戸商業で同級であった私がその家に出入りするうちに同人に加えられていた。そのあとさきのころの私を、金森正典とからみあって「峠」づくりに没頭していた状況をのぞいては考えられそうもない。たとえば朝会ったばかりなのに夜になるとまたでかけて行っておそくまで雑誌の編集や印刷のこと、映画や文学そして仮空の恋愛のイメージについて話しこむぐあいであった。同人は何人かいたけれど、金森と私の二人が結局のところ雑誌発行のすべての仕事を分担した。彼は中学を卒業したまま父の建築業の仕事を手つだわされ、そのことを苦にしていたが、時折職人肌のかたくなな気質をおさえかねているところなど、私には親ゆずりのものと見え、その父の仕事から彼は離れられないだろうと思えた。彼は処生の上で文学をどう仕末するかをいろいろ工夫しながら、どうしても文学も捨てかねてなやんでいた。また彼はその年ごろですでに柿渋のような文学の滓を理解していたようなところがあった。彼の周期的なスランプがまわってくると、「峠」はしばらく冬眠にはいることをくりかえしたが、私が長崎高商にはいったあと、彼はもう一度「峠」をつづけようと決意したようだった。（中村は「第二次」と書いているが、「第三次」だったような気もしてきた。金森が長いスランプにはいったのは一度だけではなかったと記憶するから）。とにかくそうして「第二次峠」は企てられたが、そのとき長崎高商での私の同級生たちが加わってきたのだった。（そのあと金森は兵役に服し、彼の軍服姿などとうてい想像もできなかったのに、そのまま長い軍隊生活に耐えたあと、沖縄戦に加わり戦死した）

横にそれた話の筋をもとにもどすつもりが、かえっていっそうひどくそれさせたことになったが、そのあいだをつなぐため中村の手紙の一節を借りて、書きだしのところまであとがえろう。

（しまお・としお氏は作家）

第八回 松原賞小説募集

松原賞小説募集も第八回を迎えます。作者の生活を凝視し、意識化して、現代日本の情況の深層と接触する小説を期待します。回を重ねる毎に作品の質的向上は認められますが、選者井上光晴氏の指摘しているように「根本で自己をいつわっている」のではないか、という疑問が感ぜられるようです。力作を期待いたします。

今年は新しい試みとして、三月中に、過去この松原賞に応募して下さった人々をまねいて座談会「現代日本と文学」あるいは「文学に於ける現代的方法」を行なう予定です。応募予定の読者はもちろん、文学的状況にアプローチしている人々の参加を併せてお願いいたします。

◇応募規定◇

応募資格　制限なし（但し新人に限る）
枚数　四百字詰原稿用紙三十枚以内
締切日　昭和四十年四月末日
発表　本紙昭和四十年六月下旬号
賞金　入選（一篇）五千円、佳作（二篇）賞品
送り先　福岡市箱崎九州大学新聞松原小説選考係
選者　交渉中

なお原稿には住所、氏名（筆名、本名とも）年齢、職業を必ず書きそえて下さい。原稿は原則として返還せず、入選作の版権は本紙に属します。

九州大学新聞

九大、東洋大に惜敗

全国大学ラグビー大会

新春恒例の第十五回全国大学ラグビー大会は二日、午前十一時から名古屋市瑞穂ラグビー場で八チームが参加して開幕された。九州大学は第一回戦で松山商大に快勝したが、四日の準決勝戦で、東洋大に惜敗した。なお南九州代表の鹿児島大学が関東代表の東洋大を破り、初優勝をとげた。九大の成績は次の通り。

一月二日
九大 33（20−0 / 13−3）3 松山商大

一月四日
九大 3（3−0 / 0−12）10 東洋大

監督談 うちのチームは今年が初参加で、そのためか、技術的には優勝候補にあがってたんですが実力を十分発揮できませんでした。それに選手も二人がケガで出場できず、また試合中も一人が退場させられるという不運が続いて東洋大には完敗でした。それにしても鹿大の闘志は立派ですね。うちのチームは精神力が弱くてどうもいけません。今後は、チームの精神力の高揚に、特に注意して、実力を十分発揮できる試合をやりたい。

次号予告 吉本隆明論（十）河野信子。＜書評＞マルクス主義者たち（鈴木広）、模写と鏡（宍戸恭一）。憲法論の試み（二）中村きい子。山口大学事件など。

松原

黄色いツバキと青い金魚

執行嵐（教養部助教授・社会学）

幼い頃、私は真赤なアマリリスの花が好きであった。隣家の庭に咲く、その強烈に赤い花が無性にほしく、とってくれと泣きさわいで女中を手こずらせたことを、今でもあざやかに思いだす。その思い出のためか、今もなおアマリリスの真赤な色が好きである。しかし、何時の頃からか、私は洋花よりも日本の花木に心ひかれるようになった。とくに、ツバキが好きである。それも一重にかぎる。あの石庭で有名な竜安寺の中庭に咲く侘介ツバキの可憐さ、京都高台寺の垣根がわりに生い茂っているヤブツバキの素朴さ。一重梅心の粋をあつめた肥後ツバキの華麗さ。なかなかに佳いものである。

このツバキについて、最近私は花木に関する書物で興味ある話を読んだ。

今日、ツバキ愛好者の間で、夢のツバキとして探がしもとめられているのは、黄色いツバキと青いツバキである。ところがこのうち黄色いツバキは、奇しくも現在はげしい戦乱のうずのなかにあるベトナムの南北両域の境界線上の森林地帯に野生していることが報告されている。そのことは、旧ハノイ大学のフランス人植物学教授によって確認され、その標本も採集されているそうである。不幸にして移植に失敗したが、それは中国に野生するサルエネンシスという種類の一変種であるといわれている。

さらに、この黄色いツバキについては一つの挿話がある。香港に住むあるずるい男が、自分はかってこの黄色いツバキをベトナムの地で採集してもち帰り移植に成功し、すでに苗も育成できているので、分譲してもよろしいと、アメリカに話をもちかけ、大金を集めてにげ出してしまったという話である。自生の黄色いツバキの入手をあきらめてしまった恰好のアメリカの人たちは、今この黄色いツバキを人工交配によって作出するのに、やっきになっているということである。まことに皮肉な話である。

この黄色いツバキの話を知るにつけ、思い出されるのは、先年大和郡山で見た青い金魚のことである。

大和の地は、寒暑ともにきびしく、その期間も永い。気持ちの良い気節は、四、五、十、十一の四ヵ月に限られる。したがって、観光客もこの期間に集中し、古社寺は静かな雰囲気を失う。大和に居住していた私などは、この期間は古社寺をさけ、もっぱら大和特有の地域産業の見学をすることにしていた。奈良の墨作りや蚊帳製造や赤膚焼、高山の茶せん作り、下市の割箸製造等の見学がそれである。大和郡山の金魚養殖池をおとずれたのも、こうした好時節であった。

大和郡山の金魚養殖は宝永年間以来の伝統産業であり、生産量は全国生産の約四割を占め、東京や愛知をしのいで第一位である。ここで生産されるのは、主として、夏の風物詩をかざる夜店の金魚つりなどにみられる和金（ワキン）である。和金は別名ヤマトとも呼ばれる。しかし、熱心な養魚者の手によって日本金魚のほとんどの種類の保存と繁殖の努力もなされている。私のおとずれたのは、なかでもとくに熱心な島田氏の養魚池であった。九州ではあまりなじみのない愛知特産の地錦（ジキン）等も養殖されていた。ジキンの特徴の一つはその体色である。胴部が白で、ひれとえらぶたや口辺が赤いものを示すのであるが、胴部の白は天然状態で発色することはまれである。そのため、鱗を背中からすこしずつ数回にわたって剥離して、人工着色をするのだそうである。昔は、尾張徳川家の紋を、そのようにして白く発色させていたこともあるということである。

さらに、この養魚池には、東京三京水産とともに、前年輸入したばかりの中国金魚が多種飼育され、日本の風土への馴化と繁殖に努められていた。それらはどれも見事なものであった。鱗が真珠玉を半切にしてはりつけたようにまるみをおびてかがやいている珍球魚（チュンシュユウイ）。眼のふちが水泡のようにふくれ、まるで透明のビニール風船を眼にかぶったような水泡眼（シュイポオエン）。頭がヒキガエルに似て出目性の哈蟆頭（ハマトウユウイ）。辰砂色にかがやく揺台月（ヤウタイユ）。

しかし、なによりも私が感嘆したのは、幻の金魚とでもいうべき青文魚（ランウェンユウイ）という名の青い金魚であった。青い金魚のむれは、私のおどろきをよそに、日中民間外交の成果を誇るごとく、静かに遊泳していた。

私には、この大和郡山の青い金魚と今もなお戦火のなかに咲きつづけているであろうあのベトナムの黄色いツバキの運命とが、まことに対称的に思われてならないのである。

文化総務は二月か三月の初旬に九重山の家合宿所でGLT会議を予定して、現在その準備にとりかかっているそうだ。このGLT会議は毎年のようにおこなわれ、約束されているかのようにそのつど失敗を記録しつづけてきたものである。それにもかかわらず文化総務が今年度もまた開こうとするからには、そこにはなみなみならぬ覚悟と計画性があるに違いない。またそう考えるのがわれわれの「代表者」への礼儀であろう▼しかしGLT会議は非常に困難な状況の下にある。学生一般は政治的問題に限らずあらゆる面に無関心を示している。その暗い影は各サークルの内面深く射していて、各サークルは名目だけの集団と化してしまっている。この状況は既成のサークル理念からは無秩序で主体性のないものと考えられ絶望的にうけとられている▼吉本隆明氏はその「模写と鏡」（一九六四・一〇・「思想」）のなかで庶民の「政治的アパシー化現象」を権力への現実的な唯一の抵抗スタイルと評価したが、それは現状の核心をついている。そこに「吉本の庶民への共感」とか「庶民主義」をみるのは一面的である。「安保」以後の日本独占経済の高度成長と相対的安定の深化は、政治的には民主主義の徹底化・福祉国家の建設という倫理観を一般化しており、そういう社会に対応する人々は必然的に自己を「無化」せざるをえなくなる。所謂「私的生活」と「公的生活」は今日ではもっとも顕著であるとみなくてはならない。従って庶民の「政治的アパシー化現象」は抵抗のスタイルではなく現実社会の流動に則したところの現象とみるべきものである。▼社会を感性的・実践的対象とはせず、観照的対象とする傾向は学生一般にも共通のものである。戦中派・安保派がそれなりの思想的「核」を所有しているのに較べ、われわれの世代は全く浮遊化している。そしてそれが現実なのである。GLT会議の失敗の原因が「各サークルの指導者の学生運動家にたいする劣等意識とその裏腹の蔑視の意識がコンプレックス（複合体）として存在する」という点に求められたり、「サークル員のヤル気のなさ」に求められてはならない。現実社会そのものの内により根本的・本質的な原因があるのだ▼ともかくGLT会議が言いうることは、現実社会を総体的に把えうる方法を探索する補助的手段としてGLT会議を位置づけ、その目的にそう「テーマの撰択」と「運営の仕方」が考慮されるべきだということのみである。

広告のため非表示

吉本隆明論（九）

思想（四）

〈マルクス〉の再検討——

「自立」の坑道を掘る作業の開始

二重存在の表出としての疎外を説く

河野信子

★自然哲学の範疇での「疎外」☆

自然哲学の概念としてマルクスの思想のなかから〈疎外〉をつかみとった吉本は、マルクスの思想の脈絡をさらに「法」「国家」「政治」についての疎外の運動体の峻嶮さに向って進む。ここでは「マルクス主義者」たちによって提出された一切の素材が拒絶される。人間が類的存在として現実的で矛盾のない構成をこころみる以前に、人間は自己の本質的二重性を関連のなかに表出することによって外化する。吉本はこの点をフォイエルバッハの宗教についての思想のなかに求め、さらに、人間の宗教的疎外との同質性ー幻想性ーを指摘したマルクスの「国家」「法」についての「疎外」の概念に出会う。フォイエルバッハが展開した人間の宗教的疎外——無限であるという自己意識の外化とそれによる自己意識の支配——はマルクスによってはじめて、「法」「国家」に結びつけられたわけであるが、この系譜は指摘されないままに終っていた。吉本はこれをえぐり出すことによって、政治的愚物とマルクスとのちがいを読みとっている。

「マルクスは、進歩派ヘーゲリアンの一見するとラヂカルにみえる愚論に当面していた。宗教的な幻想性は、政治的な共同体の内部では『法』を至上物のようにかんがえ、人間自身を第二義的のようにかんがえる自己意識、いいかえれば国家法のなかに実現され、それが人間にはねかえってくることは、すでに、フォイエルバッハが『キリスト教の本質』のなかで暗示していた。これを洞察しきれなかったのは、現在の芸術的な愚物とおなじように存在した、当時の政治的愚物たちであった。」（マルクス紀行）

★マルクスを読む吉本の論理☆

自然との関連のなかで、自己意識をもつ人間が、二重性そのもののなかでしか存在することが出来ないという本質は、人間の類的存在としての自己意識が表象する際宗教的疎外は、政治的な共同体が整備される段階では「法」を至上物と考える人間の自己意識となって、直接的な外在的な疎外のうちにあり、この自己意識の内的なものと、外的な表象とは、即自的にまた対自的に二重性をもつ同一物のなかにある。この点にかんしてマルクスは次のように書いていた。「完成した政治的国家は、その本質からみれば、人間の物質生活に対立する人間の類生活である。この利己的生活の諸前提のすべては、国家の圏外に、市民社会のうちに存続したままである。ただし市民社会の諸特質として。政治的国家がその真の完成にたっした場合には、人間は思惟のうち、意識のうちばかりでなく、現実のうち、生活のうちでも、天上と地上の二重の生活をおくる。つまり人間が自分自身にたいして共同的存在として通用するところの政治的共同体内の生活と、人間が私人として行動し、他人を手段とみなし、みずからをも手段にまで下落させ、他勢力の玩具となるところの市民社会内の生活とである。政治的国家が市民社会にのぞむ態度は、天上が地上に臨むそれと同じく精神主義的である」（ユダヤ人問題によせて）。これを読みとる吉本の論理も正確に展開される。

マルクスはユダヤ人問題のなかで宗教的封建的な一切の特権を廃止して、私有財産、身分、職業、教育などの平等思想の自由を宣言した近代民主主義国家の完成形態である共和国がもつ人間の疎外、すなわち近代的な「政治的解放」がもつ表象について全展開をこころみている。民主主義的国家によって宣言された利己的人間の自由とは、人間の自己自身の精神的諸要素の無限の自由の運動体を外化し外化することによって、疎外され表出された人間の幻想の共同性の本質が、人間を支配する。「キリスト教の幻像であり、夢であり、仮説である人間の主権、しかも現実の人間からは区別された外的な存在としての人間の主権が、民主主義においては、感性的現実であり、現在であり、現世的原理である」（ユダヤ人問題によせて）と。この点にふれて吉本は次のように言及している。「政治的国家は、非政治的国家の具体性である市民社会の内容としながら、それから疎外された形式上の共同性として存在する。だから国家と、家族や市民社会とはヘーゲルのいうような矛盾のない存在ではありえない。国家は、家族や市民社会自体の生活過程が表象されたものではなく、家族や市民社会が、自己から区別し分離する（疎外する）理念の生活過程である。」（マルクス紀行）

★俗流疎外論への批判☆

吉本隆明が、人間の二重存在の表出としての疎外を、マルクスの初期論文に立ってこだわりつづけるのは、一方では教科書風の疎外論が仮象性の因縛から解き放たれていないことへの、徹底した批判をマルクスの思想に深くこだわることによって、本質と表象との矛盾による連関をひとが正確につかみとるとは、どのようなものであるかを示すことであり、他方では「マルキシスト」たちのマルクスからの論理的な歪みに立向うという仕事に自らの思想を結集させていこうとしたからである。人間が自己自身の否定を通じて、表出したものをさらに自己自身へ媒介するものとして在る疎外態を、疎外態としてではなく、解放のメルクマールにしてしまう「進歩的」諸運動とは吉本自身は思想的に無縁であるという証明へ自らをかりたてることでもある。吉本は政治的国家のなかでの人間の疎外をみたあとで、芸術などの幻想の外化されたものに共通する愚物たちの反応のスタイルをみる「現在でも進歩派の芸術運動は、芸術内部で芸術内部での保守的な党派性と対立し、これをつぶしたり、引き倒せれば、それで何ごとかであるかのように錯覚している。しかし、人間が解放されなくても、政治的な解放はありうるし、人間が現実的に自由でなくても、芸術は自由でありうることを、かれらはしらないのだ。芸術にレーニン的党派性などは存在しない。存在するかのような仮象が成立するのは、芸術的な偏執が、あらゆる姿でなり立ちうるという自由社会（資本制社会）の自由な「仮象」の表象のひとつにしかすぎないのである。一見すると進歩的にみえたり、ラジカリズムにみえたりするこの種の退行は、「マルクス主義」芸術論と名のつくロシアに発祥し、半世紀ちかくも亡霊のように各地に存続してきたのである」「前出」と、いった具合に。

★自己の思想への再検討☆

「政治と文学」論争、その他で「主題の積極性」「リアリズムの優位性」論のくだらなさへむかって、投げつけた批判や、「政治的」全運動の解体のなかにいなければならなかった現実的体験の吉本自身の思想への再転化である。マルクス思想の吉本的集約ではなくマルクスの思想の全構造をあきらかにすることによって、自らの思想の全展開の再検討をはかるという困難さを自らに課している。抒情的な部分と構造的な部分へと仕事を二分し、より深く両者の間で裂けていた吉本が、全運動が挫折している現状況のなかで自立の坑道を単独者として掘るという作業の開始がマルクス思想に向けられたとみるべきであろう。高度な抽象へ向う抽象世界のなかでの自問自答を繰り返えさねば、現実の世界そのものも見えなくなってしまうのだというところに、深くのめりこみ爪をたてつづける仕事の開始でもあろう。歴史のなかで高くそびえ立つ思想を自己の内部に反照させ、反照させることによって出来た自己の思想との関係が自己自身と重ねて集約させるという仕事は、ひとに前提された主語部分につづく述語部分の否定をせまって定立されることでもある。

マルクスは市民社会における人間の自己意識（共同意識）は政治的国家を疎外するという論理を定立した。これをマルクスはさらに進めて、「ユダヤ人問題によせて」の論文の末尾にこの疎外の止揚の方向を「現実の個別的人間が抽象的公民を自己のうちにとりもどし、個別的人間のままで、その経験的生活、その個人的労働、その個人的諸関係において類的存在となるときはじめて、人間がその〈本来の力〉を社会的力として認識し、したがって社会的な力をもはや政治的な力のすがたで自分自身からきりはなさなくなるときはじめて、人間的解放は成就されたのである、と書いている。みずからを現実的で矛盾のない類的存在として構成しようとする人間のこころみが、政治的解放を形式のうえで宣言した市民社会にたいする、人間的解放へむかって人間が主体的に動く止揚の方向である。社会的力は、類的自己意識から抽出された幻想の主権を媒介にして、公権力をになう集団（官僚制）によって、現実化への道筋をもつ。この官僚制によって担われた幻想の共同意識は、公権力として、類的存在を志向する疎外止揚の運動に限りない対立でもって迫ってくる。本質的に自己自身の無限性の外化であったものが、現実化されるとき、生活者から、公的行為をふくめて、トータルな人間の類的存在への対立者となってあらわれる。このことは類的存在として現実的に矛盾のない構成をこころみようとする人間にとって本来的に背負わねばならぬ公権力にたいする無限の対立と、永続的な革命という志向をもたせる。この対立は原理的なものであって、人間的存在の二重性がもつ抽象過程へのアンチテーゼとして、具体的現実的に展開される。これは、完成された政治的国家のなかにおける人間の存在についてのマルクスの予見であると同時に、人間的自由と政治的自由の相剋についての明確な指摘でもある。吉本はマルクスの国家論のこの部分については言及していない。吉本の仕事がマルクス思想の根源である〈疎外〉——人間と自然との相互規定として——の現実のなかでの全脈絡を明らかにすることに全重量をかけている以上、当然のことと思われる。吉本のマルクス研究はつぎに「市民社会の経済的なカテゴリーがマルクスのなかで『自然』哲学と政治哲学の矛盾する現実的な領域として成立する」経済学へと進んでいる。（未完）

（こうの・のぶこ氏は九州サークル同人）

新部長に内藤教授

高橋教授、学生部長を辞任

昨年十月、学生部長に就任した高橋義孝教授（文学部）は二十日、健康上の理由で同部長を辞任した。このため、新部長に内藤莞爾教授（文学部）が任命された。同教授は高橋教授の任期二年の残り期間をつとめる。

〔教科書〕一元化運動再開さる

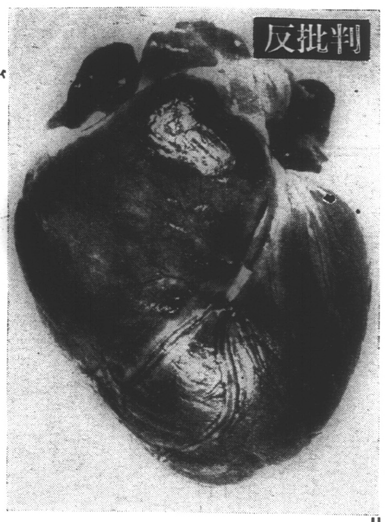
九大生協

このほど教養部では、四月の新入生受け入れを前にして、教科書販売生協一元化実行委員会が結成された。この一元化運動は昭和三十六年に提起されて以来、生協の課題の一つとなっているもので、現在、語学関係以外はほぼ一元化（生協書籍部の一手販売）されているが、語学関係では一元化されているのは仏語のみで、英語七十軒、独語三十五軒となっている。

生協では一元化の理由として①教科書購入の繁雑さをなくす②割安で買える③生協の強化をはかり、組合員の生活を守る、をあげているが、しかし数年前に運営上の失敗があった事で、教官のあいだには生協不信感がいまだに残っており見とおしは必ずしも明るくない。なお実際的活動の方針としては①教官との交渉②生協組合員へのアピール（クラス討議等）を計画している。

編集室から

◎…谷川雁氏の「わが組織空間」は先号の第四回をもって一応終らせていただきます。御愛読ありがとうございました。◎…本号から始まった新連載「現代の学生群像」はおよそ五回の予定でつづけます。これにかんする読者諸兄の御意見をお待ちします。◎…松原賞評論の選考結果が遅れていますが、選者の多忙中のため、あと少し待って下さい。



■本誌十二月二十五日号〈ねあん〉批判に対して■

■安部克之（主体性研究会）

孤独という積極的な意味

〈節子〉のように積極的に生きようとする存在

主体性研究会の〈ねあん〉一号に対する本紙の批判（十二月二十五日号・五一九号）について同研究会のメンバーの一人である安部克之君から反批判がよせられましたので、ここに掲載いたします。本紙と主体研との間で行なわれるであろう、論争について読者諸兄の夫々の場からの発言をお待ちします。（編集部）

×　×　×

昨年の秋、〈ねあん〉一号が出た際、ぼくは、〈孤独について〉ということで、当時の気持なり、考えなりを書いたのだった。〈孤独〉というのは、あくまでぼくの実感から来た言葉であり、その点から言えば、あまり厳密なものではない。その上に、色々と曖昧な言葉をとりとめなく、並べたてたので、かえって孤独ということが誤解を招いたのは、矢無を得ぬことだった。案外このようなことは、ヘタに口に出したり、文章にしたりする程、誤解をうけるのかもしれない。自分でも、なかなかうまく表現できなくて困るのである。しかし、誤解は誤解として正さなくてはならない。事実は事実として、あるがままをできるだけ正確にしなければならないからである。

Ⅰ

ぼくに向けられた批判は、要するに、周囲から切り離したところで、心情的な安らぎを得て、自己満足しているにすぎないということであろう。例えば、〈ひととひととの関係そのものを通じて自分の存在へはせ下るのではなく、それと切断した地点で人とはっきり区別し、余裕の情緒の中にあるのが、なにか主体性のように思い違うのは……〉とか、〈自由と責任の全面的引うけという言葉には何に対して、といかにしてかが喪失している。自由と責任は外部とのある関係を持つことによって始めて自分の自由と責任が生じてくるであろうし……たとえ神であっても余裕の情緒で終局することは許されないはずであるし、歴史はつねにそのことを私達にしている……〉とかいう具合である。こうしてみると、ぼくが〈余裕の情緒〉という言葉をつかったことがいかに誤解の種をまいているか感ずるのだが、実はそのことは、自分が孤独であることに気づいて、やっと自己のあるがままをつかみ得たときの実感なのであり、あくまで〈孤独〉ということの正確な理解が問題なのである。

ところで批判者は、批判にあたって肝じんな点において、不親切であり、軽卒である。というのは、まず現実の人間関係は決して切断しえないものであるという命題とおまえは、現実の人間関係から切り離したところで、勝手に自己満足しているという批判を、巧みに使いわけている点である。ぼくから言えば、まず最初の命題が正しいとするなら、ぼくらが決して、周囲から切り離したところに自己満足などできるはずもないし、現実にしてもいないことを理解すべきであり、その上でなお、なぜあのように〈孤独〉が問題となってくるかを理解してもらいたいものである。その地平以外に決して論点はない。このことは、マルキストがサルトルに対してなした批判が、お互かみあうとすれば、どの地平でかということと問題が似ているようにも思われる。

別な点からみると、批判者は、周囲からの切断ということを、政治的（階級的）運動を全く行わないということに、密かに限定してしまっているのではないか。例えば〈自由と責任の全面的引うけという言葉には、何に対してと、いかにが欠けている〉と批判するとき、一体では〈何〉がと言いたいのであろう。もし、この周囲からの切断が、〈何〉かを行わないことであるならば、ぼくにとって、たいして意味のないことである。なぜなら、例えば政治的運動を行わないという意味の切断ならばあるいは積極的に肯定しうるものであるからだ。（確かに、マルクスの明らかにしたような人間の社会的なあり方、つまり労働という必然的に社会的な関係を結んでのみ生きる人間の生き方、それがいろいろ形をかえて、ぼくがそうであるという事実はあくまで欠かせないが、だからと言ってその認識がつまりプロレタリアートとしての意識が、ぼくを貫らぬいているといいうるのは、ぼくにとって余程のことである。）

ぼくらが、今の時代において〈孤独〉を云々するとき、むしろ次のように言わねばならない。ぼくらは、ほんとうには孤独になり切れない、どうしても人と人とのつながりから逃げだすことができないという事実、いわば、人として生きている限り、どうしても避けることのできない宿命的な事実に強く目覚めることからこそはじめて、孤独ということの積極的な意味、その真実の響きを聞かなくてはならないと。センチメンタルな孤独というのは全く問題にならないのである。だから、ぼくは、孤独という言葉を、ひととひととの関係の事実の表現であると言った。更に言葉をかえれば、孤独というのは、現実の頽落した人間関係から目覚めて、あるがままの自己を積極的に生きようとするひとつの存在である。これは決して周囲からの切断ではない。

おかしな例かもしれないが、人が笑う場合、ただ笑うという時とほんとうにおかしくないということがあって笑う場合がある。サルトルの短篇に、〈壁〉というのがあって最後に、主人公が、涙の出る程笑って笑いこけるのであるが、ただおかしくて笑ったというのでは一向に面白くない。おかしくて笑うのは事実だが、ほんとうにはおかしくない（笑うどころではない）ということが、同時に含まれているということがあってはじめて、笑いが生きてくるのである。このように、ほんとうには孤独になれないということが孤独の認識（孤独に目覚めること）の重大さを支えているのである。くどいけれども、孤独というのは現実決して、ひとりの人間が、関係から切り離されることではなくて、その関係がちゃんとある上でのこと、更に言えば、その関係を切実なものとしてとらえればのことである。

Ⅱ

この前の芥川賞は、柴田翔の〈されどわれらが日々〉であったが、この小説がなえるところが、今ぼくの表現しようとしていることのように思うので、しばらくこれに触れてみよう。この小説は、様々な人物や事件が、巧妙に交錯してできているのであるが、結局は〈節子〉の生き方に収れんしていると言ってよいだろう。ひとつ問題なのは、この小説の基調となっている作者の淡いニヒリズムであり、これはまた、ぼくらの世代の一般的な心情のようにも思われるのだが、もしこれから脱することが期待されるとすれば、やはり、〈節子〉の生き方にひとつの道が求められると言ってもよい。では節子の生きたものは何であったか。なぜ節子は、〈文夫〉と別れて行かねばならなかったか。

節子の生きたものは、ひとつの青春であった。青春はつきつめれば、若さのことだと言ってよい。若さの生みだす、情熱的な生命のほとぼしりは、自分の外のひとつの価値に向って、とどめるところを知らずそそがれる。例えば、恋愛、そして革命（あるいは宗教）。それは老人のように惑ったり、妥協したり、冥想的になったりしない。節子の〈野瀬〉への愛情、革命的運動への参加は、まさにそれであった。（この点では登場人物はほとんどそうである。）それは疑いの対象とは決してならない。真摯に、情熱的に、又、それだけ不可避的、盲目的な仕方で。しかしながら、現実のひととひととの関係、社会の運動はこのような節子の生を否定する方向に変化してくる。絶対であるはずの、そして自分の心をとらえて離さないところの、異性が、革命が、実は絶対ではなくなってくるのである。これは一体どうしたことであろう。

青春の特質は、若さであり、その生命力であるが、それが強ければ強い程、それだけ、自己の外で言ってしまえば、自己のないところで、ひとつの価値が盲目的に無反省に追求される。そこでは、ありのままの自己というものがまだ露呈されず、自己の失われたところで、異性、革命といったものが一義的に配慮され、その照り返しが自己を規定しているにすぎない。しかしそのことは、現実の人間関係、社会の運動のなかで、従ってその人自身の内部で、矛盾となってあらわれずにはおれないのである。しかし都子は、そのような自分の矛盾を明らかにしないまま、〈文夫〉のふところの〈逃亡を計ったのだった。しかし現実の人と人との関係は、そのような矛盾をおおいかくすことはない。矛盾は矛盾としてますます明らかにされ、その解決へ自からを導く。都子は、自分の矛盾が、〈佐野〉の自殺を契機にどこからくるのかを、次第次第に確かめて行かざるをえなかった。もうこれで、なぜ節子が文夫から去って〈孤独〉の道を選んだかはっきりしたと思う。青春は、その喜びも哀しみもすべてをのみつくす。なぜならそれは誰のせいでもなく若さのせいであるからだ。人はだれも、その中で、せいいっぱいに自己の青春を、その若さを生きてくるのである。しかしいつかは、その青春は終らずにはいられない。現実の運動の厳しさが、それをぼくらに強いるのである。かくして節子は、文夫から別れてゆくのである。

『ここで、節子が孤独を選んだことが、つまり自己の回復であることに注意しなくてはならない。今まで単に、自分の外のある価値の照り返しでしかなかった自己がそのあるがままを露呈したときに、ひとは〈孤独〉に気づくのである。なぜなら、自己の回復は、そのひとをして、今までのすべての人間との慣れ合い、価値とのなれ合い、それからくるあらゆる醜くさ、曖昧さを放棄させ、自己の存在そのものの、絶対に疑うことのできない価値へ指し向けるからである。節子のとった孤独の道は、それでも、人間関係から切り離された自己満足にすぎないのだろうか。それは決して、ただ自己の殼の中で、ささやかに余裕を味わうといったセンチメンタルなものではない。節子が、文夫と別れてゆくのは、あくまで〈再たび（ほんとうに）会えるために別れる〉ことでしかありえないのである。

Ⅲ

こうして節子のたどったプロセスは、ぼくら若い世代と共通のものであり、この世代のひとつの帰結がぼくの言う〈孤独〉であることを説明したつもりである。しかしながら、孤独は帰結であるというよりもむしろ、はじめてそこからほんとうの歴史が始まる出発点であると言わなくてはならない。それは、すでに述べたように、孤独が、自己の存在そのもののゆるぎのない価値、その自由さに目覚めることであるとしたときに、すべてを言いつくしている。他のなにものにもかけがえのない一回きりのこの自己の存在（ここに生きてあるということ）が、自由そのもので貫き通されているという。明らかな事実の認識、それよりくる、喜び、ゆとり、孤独感、更に強い責任の自覚は、ぼくらをして歴史的な営みへと解き放つであろう。言い換えれば、これはあくまで、ぼくの生きる態度、つまり人生に対する姿勢の問題なのだが、自然の事実をあるがままにとらえそれに正しく従うということ以外にはありえないだろう。自己のあるがまま、人間関係のあるがまま社会の運動、自然の運動のありのままを、科学的に正しく（つまり学問的な手続きをふんで）とらえること、そしてその事実を受け入れのこと、ただそれだけを十分として十分なように生きる他はない。幸い、ぼくは、大学という自由を可能な限り追求することの許される学問の場にいる。ぼくは、それを生かすべく行為するだろう。そのことがまた、未来のぼくを創りつづけるに違いない。

広告のため非表示